

三重県人権教育資料より(抜粋)

武四郎の姿勢

武四郎は、アイヌ民族の若者が次々と漁場へと連れて行かれ、過酷な労働で倒れていく姿を目の当たりにし、幕府に対し、明日の開発はもちろん大事であるが、それよりもまず今日のアイヌ民族の命と文化を救うべきであるという内容を、調査報告書の随所で訴えている。そして、民族と文化を守るためには、まず人びとにアイヌ文化を正しく理解してもらうことが必要であるとし、アイヌ民族の紹介に努めた。

アイヌ民族の暮らしを伝えるために出版された『蝦夷漫画』(安政 6[1859]年刊)は、アイヌの人びとの生活文化を武四郎自身が描いたもので、アイヌ文化の小百科事典とも言える内容である。

また、和人がアイヌ民族の姿を正しく見つめることができれば、アイヌの人びとから学べることはたくさんあるのだとして、調査で出会ったアイヌの人びとから直接聞いた話をありのままに記した『近世蝦夷人物誌』には、3 巻 99 話、百数十人のアイヌの人びとが実名で登場し、勇敢な姿や、親孝行な話、無理難題をつきつける役人に理路整然と立ち向かう聡明な長老の姿など、アイヌ民族の生きる姿を紹介するものであった。

武四郎の記録から

武四郎が出版した『知床日誌』の挿絵には、アイヌ民族からの訴えを聞く武四郎の姿が描かれている。

武四郎が知床地方のあるコタン(集落)を訪れると、コタンの人びとが出迎えてくれたのだが、そこには老人と子どもしかいない。そのことを長老に尋ねたところ、長老が涙ながらに訴えるという場面である。

その訴えとは、男性は択捉島へ連れて行かれて働かされ、女性は単身赴任の役人や商人たちが自分たちの好きなようにするので、村にいれば文化を伝承し、結婚して子どもを作り、親を養っていくような大切な時に、あらん限りに責め働かされ、若者がいなくなった村では狩りをおこなうこともできず、食料が不足して困窮しているのだ、というものであった。

武四郎からこの話を伝え聞いた鈴木重胤は、本当に人間の情をわきまえない行動であり誰であってもこのことを見過ごすことはできない、アイヌの人びとのことを思うと涙を流さずにはいられないと感想を寄せた。

命を狙われてもなお

次々と蝦夷地の実情を公表していった武四郎は、松前藩への批判を容赦なくおこなったことから、当然命を狙われ、調査の妨害を受けることや、暗殺されそうになったこともあったという。

しかし、武四郎は、アイヌ民族の訴えを自分だけでなくもっと多くの人びとに伝えたいという願いから、執筆・出版活動を決して止めることはなかった。そして、こうした活動が、蝦夷地から遠く離れた江戸や京都、大阪などにいる人々が、そこにいながらにしてアイヌ民族のことを知ることができたという意味では、非常に大きな効果があったといえよう。

出版を通して武四郎が多くの人びとに知らせたかったことは、蝦夷地の地理や自然のことだけではない。そこで暮らすアイヌの人びとが、独自のすばらしい文化を持っていることや、その文化が尊重されることなく、過酷な状況におかれていることを伝えるものでもあり、アイヌ文化を正しく理解すべきこと、松前藩と商人たちがおこなう「場所請負制度」を廃止すること、幕府の「撫育同化政策」が誤りであることを一貫して訴え続けた姿勢と冷めることのない情熱には驚くべきものがある。

政治の流れの中で

武四郎が目指していた北海道は、アイヌ民族が安心して暮らすことができる大地であった。そのためには、江戸時代にアイヌ民族を苦しめていた「場所請負制度」の廃止と商人の排除などを強く訴えたが、商人たちも自分たちの利益を守るために、長官に賄賂を送るなどして抵抗した結果、武四郎は疎外され、意見が聞き入れられることはなかった。そればかりか、政府の開拓政策は先住民族であるアイヌの人びとが長く暮らしてきた土地や生活・文化を奪い、民族としての尊厳を傷つけていくことにつながっていく。

武四郎は、長年の功績が認められ国から従五位という位を贈られていたが、開拓使を半年ほどで辞職するとともに、この従五位を国へと返上している。そこには、政府のアイヌ民族に対する政策への反発とともに、地位や名誉ではなく、アイヌの人びとを守るために力を尽くしたが果たせなかった無念な気持ちでいっぱいだったことだろう。

武四郎に学ぶ

今から 150 年前の江戸時代、武士を頂点とする社会では、すべての人びとが平等ではなく、人権という考え方は多くの人びとの心の中には芽生えていなかったことだろう。

その中で、アイヌ民族の人権を守るために力を尽くした武四郎であったが、ともすれば閉鎖的で同調を強いる社会構造の中で、彼はなぜアイヌ民族の文化を受け入れることができたのであろうか。その答えは、彼が蝦夷地へ渡るまでの間にある。

武四郎の生家は伊勢参宮街道沿いにあり,小さい頃から多くの旅人を見て,その姿に刺激を受けて育った。

そして,若い頃から全国各地を歩き,各地の文化に触れ,学者に出会い,見聞を広めることで,さまざまな考え方,価値観を受け入れることができる広い心をもつ人間へと成長していったことだろう。

アイヌ民族と出会い,異文化に触れ,受け入れることができたのも,まさにそうした経験があったからではないだろうか。

人権教育をきちんと受けてきた私たちであっても,異なる文化,価値観に出会ったとき,自分たちの文化や考え方とくらべて優劣をつけてしまうことや,表面だけで判断し,他を否定し,排除することがないとは言いきれない。

武四郎のように文化の違いを正しく理解し,異なる文化,価値観を受け入れていこうとする心,まわりに流されることなく,まっすぐにアイヌ民族の真の姿を見つめた姿勢は,現在の私たちにおいても非常に大切なことである。